魔界王女
金眼のファルシア
弱虫王女
上田ながの
表紙／ピエ～ル☆よしお
試し読み版
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔界王女 金眼のファルシア　弱虫王女』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『魔界王女 金眼のファルシア』『魔界王女 白銀のロゼッタ』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

魔界王女
まかいおうじょ
金眼のファルシア
弱虫王女
上田ながの
表紙／ピエ～ル☆よしお
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ファルシア＝メリル＝カナール＝レリアリア

魔界六名家筆頭・レリアリア家の王女様。強気で高飛車。強大な魔力を有する。本人によると百二十歳らしい。

夜霧東子（やぎりとうこ）

ファルシアのパートナー。レリアリア家を人界で補佐する夜霧家の少女。優しく大人しい。

三島春香（みしまはるか）

ファルシアの同級生。ファルシアと不純同性交友の関係にあるらしい。

「はいっ！　それじゃあこれから体力測定を始めます」
体育教師の声が晴天下に響き渡る。
（うう、体力測定か……嫌だなぁ……）
正直嬉しい授業ではない。夜霧東子は表情を曇らせた。運動というものはどうしても苦手である。それに、体育の際に身に着けなければならない体操服が恥ずかしかった。
なんというか、みっともない気がする。
身体にぴっちりとフィットする体育着が、異様に胸を強調しているみたいだ。今にも破れそうなくらいに膨らむ胸元に、男子生徒達の視線が集まっているのが分かる。今時ブルマというのも問題だ。ムチムチとした太股が見られてしまうではないか。
（も、もう少しダイエットしておけばよかった……）
あまり細身の身体とはいえない。どちらかというと肉付きはいい方だと自分でも思う。普段あまり気にしないようにしているけれど、こういう格好をすると恥ずかしかった。
（は、端っこにいよう。できるだけ目立たないように。目立たないように……）
そろそろとクラスメート達の輪の中に紛れ込もうとする。
「ちょっと東子、どこへ行くつもり？」
が、ハシッと手が掴まれてしまった。
「ひへっ！　ふぁ、ファルシア様……」

手を掴んだのは一人の少女。
ネコ耳の様な癖のついた髪に、やはり猫の様な金色の瞳を持った少女。東子に比べると随分細身な身体つきをしている。身に着けているのはやはり体操服で、胸元はぴっちりと膨らんでいる。ただ、形は美しいけれど東子程大きくはない。微乳というべきか？
その少女の背中には蝙蝠のような羽が生え、パタパタと揺れている。ブルマからは先端部が尖った尻尾が伸びていた。一目で人ではないと分かる。
彼女の名はファルシア＝メリル＝カナール＝レリアリア――ぱっと見は東子よりも年下の少女の様に見えるが、これでも御年百二十歳である。彼女は人ではない。魔神だ。
元々は人間界ではなく、悪魔界やら魔界と呼ばれる世界の住人である。そんな彼女が人の世にいる理由は、とある儀式を遂行する為だ。
儀式の名は『魔神転生の儀』。千年に一度、悪魔界の王である魔王を決める為に、六匹の魔神が人間界で行う殺しあいである。殺しあい、最後の一匹として生き残った者が魔王となれるのだ。
因みに東子も人の身でありながらこの儀式に参加している。ファルシアをサポートするという形でだ。
人間を遙かに超える能力を持つ魔神であるが、彼らはそれ故に通常は人間界に長く留まる事ができない。悪魔という者は、存在しているだけで多量の魔力を消費するからだ。常

時大気に多量の魔力が漂っている魔界であれば問題ないが、魔力が微量しかない人間界では、肉体を保つ事すら難しい。そこで儀式の為に降臨した六匹の魔神達は、強大な魔力を持つ人間に助力を求めた。魔力補給の為の餌として。

そんな餌として千年前の儀式に協力した人間界の家が六つある。転生六家と呼ばれる家々だ。それらの家は魔神に協力した事により、千年もの長きの間繁栄を保ってきたのである。

夜霧の家もその一つというわけだ。

ファルシアに力を分け与える為に、東子は存在している。いわば下僕の様なものだ。

「貴女は私の横にいなさい。ふふ、私の華麗な活躍をその目で拝むの」

だからファルシアは東子に対して遠慮がない。そして東子も彼女の命に逆らう事はできなかった。

(でも、ファルシア様の近くだと……)

非常に目立つ。

何せファルシアは学園に転入してきて僅か一ヶ月足らずで、学園の支配者の様な存在になっていた。

学園中の女生徒達でファルシアと肉体関係を結んでいない者はない。女子達から羨望の眼差しがこの悪魔ッ娘に集まっている。いや、女子だけじゃない。男子からもだ。ただし、

こちらは羨望ではなく憎悪の眼差しである。無理もない話だ。何せ恋人を寝取られた者が多数であり、そうでない者もファルシアからは虫けらみたいに扱われている。恨み骨髄に徹すといった様な感じだ。

実際少し前に行われた魔神ガレスとそのサポート役であるエリスとの戦いでは、この恨みが災いしてファルシアは彼らによって陵辱されてしまっていたりもする。当然その記憶はファルシアの魔力で消して（彼女は男子生徒達を全員殺す気でいたけれど、何とか押しとどめた）あるが……。

（わ、私まで見られてるみたいです……。か、隠れたい……）

彼らの視線に晒されるのは、どちらかというと引っ込み思案な東子には耐え難かった。

「いい事東子。貴女も私の下僕なんだから、無様な姿は見せるんじゃないわよ！　もしもそんな姿を見せたら、ただのお仕置きじゃ済まさないから」

しかも、そんな無茶な命令まで下ってしまう。

「そ、そんなぁ～」

流石に声を上げてしまったが、抗議が受けつけられる事はなかった。

「どう、私の遠投は！」

ファルシアがボールを投げる。凄まじい勢いでソレは空に吸い込まれていった。キーン

というジェットエンジンみたいな爆音が響く。それから数分後、地球を一周してきたボールがポトリッと校庭に落ちた。

「この程度の距離っ！」

百メートル走。ドンッとファルシアが地面を蹴る。たった一蹴り。それだけでスタート地点にはクレーターのような穴が空いた。しかも、ストップウォッチを止める間さえなくゴールする。

「どう、誰か私に追いつける⁉」

反復横跳びが始まると、唐突にファルシアが二つに分裂した。二人のファルシアが左右に並んで止まっているように見える。あまりの速さの為にできた残像だ。勿論、何回飛んだか数えられる人間はいない。

一事が万事その調子である。記録を取る事などできやしない。

「……悪いけど、明日もう一度計り直すわね。これじゃあ測定にならないから……。ファルシアさんは、その……もう少し加減してね」

結局体育測定は明日に持ち越しという事になった。

「どういう事よ。何で私が加減しなくちゃいけないわけ⁉　人間如きのレベルに合わせろっていうの？」

体育教師の決定が不満だったらしい。結局ファルシアは一日中不機嫌だった。ぷりぷりと頬を膨らませ、ヒュンヒュンッと左右に尻尾を振っている。夜霧の屋敷に帰った後も、東子に対して延々愚痴を聞かせてきた。よっぽど自分の記録を認めてもらえなかったのが悔しいらしい。

「き、気持ちは分かりますけど……。でも、その……仕方ないかなって……」

「仕方ないぃ⁉　何がよ。私は自分の実力を見せてやっただけじゃない！」

「も、勿論それは分かりますけど……。ただ、その……ファルシア様が凄すぎるんで、わ、私達人間はち、ちょっと驚いちゃったっていうか……」

怒鳴り散らすファルシアに対して、しどろもどろに東子が言い訳をする。

「凄すぎるっ？」

この途端、ピクリッとファルシアが反応を見せた。

「は、はい」

反射的に頷く。

するとファルシアの顔に浮かんでいた怒りが一瞬で消えた。代わりに浮かぶのは得意げな表情である。フフンッと口元が笑い出した。

「なるほど。つまり、私にはとても敵わないって事に気付いちゃったワケね。自分の矮小さを思い知って、自信をなくしちゃったってところかしら？」

ググッと胸が張っていく。パタパタと羽が動き出し始め、ピーンと尻尾が立つ。
「そ、そうです！　そうなんです！　やっぱりファルシア様は凄いお方です！」
この反応に東子は（ここしかない）と思った。ひたすらファルシアを褒め倒す。ここしか彼女の機嫌を回復させるチャンスはないだろう。
「あんまり褒めるんじゃないわよ。当然の事なんだから……。息を吸う事ができたからって、誰も褒めないでしょ。私が凄いっていうのは、それとまあ、同じ様なものよ」
あっという間にファルシアの機嫌は直った。結構単純なものである。
（でも、そんなところが可愛い）
素直に東子はそう思い、何だか妹を見る姉の様な視線をファルシアへと向けた。
「何だか気分がいいわ。よし、こんな気分ならお仕置きも心置きなくできるってものね」
が、優しい視線を受けるファルシアは、優しくない言葉を口にする。
「――へ？」
思わず東子は間の抜けた声を上げた。ポカンッと口を開く。
「お、お仕置きって……何の事ですか？」
「何って、ちゃんと体育測定の前にいったと思うけど？」
「いったって……？」
首を傾げながら、本日ファルシアから向けられた言葉を思い出す。

舌っ足らずな声をファルシアは上げるが、他の生徒に拘束されており、逃げる事もできない。されるがままにブルマを下ろされてしまった。黒いショーツが露わになる。女姿にはあまりに不似合いだ。

「駄目ですよ。[redacted]がこんなエッチ下着」

内側から膨れるショーツが卑猥である。

「え、エッチなんかじゃない」

「いえ、エッチですよ。それが分かってるから、ファルシア様もここをこんなに膨らませているんでしょ？」

語りながら春香が下着の上からファルシアの肉棒に触れる。

「ひゃあっ！」

途端に小さな口から悲鳴が漏れた。

「お、お願い。や、やめてよぉ」

普段の彼女からは想像もできない程弱々しい。

「嘘はつかないで下さい。ここがこんなに膨らませてそんな事を言っても、説得力はありませんよ」

春香は聞く耳を持たなかった。どうも彼女はこの空気に酔っているらしい。いや、彼女だけじゃない。この場にいる女生徒達全員が、この状況を受け入れてしまっている。普段

えっちシーン試し読み ここがスタート!

強気なファルシアが見せる弱さに、皆が興奮しているみたいだった。
（こ、こんなの止めないと……）
そう考える。が、東子自身もこの状況に少なからず影響を受けていた。何故か声が出ない。動き出す事ができなかった。
「ほら、気持ちいいでしょ？　大丈夫。怖い事なんか一つもないですから」
挑発するような視線を向けながら、春香はショーツの上から何度もペニスを擦った。
「ひっ！　やっ！　んっんっんんっ！」
シュッシュッと上下に指が動くたび、ロリシアの身体が小刻みに震える。必死に抑えようとしている声が漏れ聞こえた。
ファルシアの肌が赤く染まっていくのが分かる。ジュワッと黒いショーツに少しシミができるのが見えた。位置は丁度肉先くらい。
（で、出てるんだ。ファルシア様のお汁が……）
東子は味覚を痺れさせるようなあの苦みを思い出す。自然と唾液が湧いて出てきた。
「あら？　濡れちゃってますよファルシア様。どうしたんです？　お漏らししちゃったんですか？」
「ち、違うもん！　わたち、お、お漏らしなんかしないもん！」
「じゃあこれは何なんですか？」

ショーツ染みに春香が指を添える。クリクリとこねくり回すように動かされた。
「な、何で……んっ！　ないもんっ！」
ファルシアの言葉に説得力はない。こね回していた指が離れると、ショーツと指先の間に糸まで伸びてしまった。
「じゃあこれは何ですか？」
「だ、だから……ち、違うの……」
ファルシアはもう半泣きである。
「じゃあ確かめさせて下さいね」
そんな金眼[redacted]女に笑みを向けながら、春香は彼女のショーツに手をかけ、それもあっさりと脱がしてしまった。
ぴょんっと勢いよくペニスが飛び出る。普段の彼女のモノと比べても、あまりに小さなモノだった。ご丁寧に皮まで被っている。ただ、その先端部は僅かに剥け、濡れた肉先秘裂を露出させていた。
「わっ、可愛い」
「普段のファルシア様のおちんちんもいいけど……こんなちっちゃいのもいいかも」
これを見て女生徒達が騒ぎ出す。
「や、やだぁ。こ、こんな恥ずかしいのみないでよぉ」

小さくなってしまったペニスを見られ、ファルシアは恥ずかしがる。必死に身を捩ろうとするが、女生徒達の拘束をほどけない。

「恥ずかしくなんかありません。凄く……可愛いですよ。ほら、そんなに怖がらないで。すぐに気持ちよくしてあげますからね」

春香はそんなファルシアに微笑みかけ、彼女の頭を優しく撫でた。

(や、そ、それは私の役なのに……)

東子は嫉妬を覚える。が、動く事ができない。他の女生徒達と同様、視線はファルシアの陰部に釘付けになっていた。

「そ、そんなのいらな――やっ！　さ、触らないで！　ひっ！　んんんん」

そんな視線を受けながら、春香の手が直接金眼[redacted]女のペニスに触れる。そのままゆっくりと上下に扱き上げ始めた。シュッシュッと手が動くたび、ファルシアの口から悲鳴が漏れる。ピクッピクッと肉棒が震えるのが見て取れた。

「大きくなってきてます。小さいのに大きくなってる……。気持ちいいんですねファルシア様。大丈夫。もっと気持ちよくしてあげますから」

これを見て春香は喜ぶと共に、口を開く。

(や、駄目っ！)

心の中で制止の声を東子は上げるが、勿論届く筈もない。ファルシアの包茎ペニスは、

春香によって咥えられてしまった。
「やだっ！　し、舌が絡んでくる！」
「しょうです。からませましゅ。ファルシアしゃまのおちんてぃんを、すっひゃいましゅ」
じゅずっ！　ぶじゅっ！　ぶじゅっぶじゅっぶじゅぅっ！
春香の動きには容赦というものがなかった。唇を窄め、淫らな音が立つ事も厭わずにペニスを吸う。勿論行為はそれだけでは終わらない。首を激しく前後に振り、口唇を使って肉棒を扱いた。
「ひっ！　んひっんひっんひっ！　や、やら、で、射精ちゃう。射精ちゃうのぉっ!!」
すぐにファルシアは限界を迎えてしまう。
「きへくらはい。い、いっぱひだひてくらはいっ！」
咥えたままそんなロリシアにクラス委員長が射精を促した。喉奥までペニスを飲み込む。彼女の口端からは唾液がダラダラと垂れ流れていた。
「んぼっ！　んもぉおおっ！」
これまで以上に激しく肉棒を吸い上げる。
「んひっ！　ひっひっひんんっ！」
金眼[redacted]女に対する止めには十分すぎる吸引だった。ビクビクッとロリシアは肉体を震わせる。そして――。

「で、射精ちゃうのぉっ！」
どびゅっ！　どびゅるるるっ！
ファルシアの身が震えた。■女は春香の頭を押さえ、腰を突き出す。
（だ、射精してるんだ……。ファルシア様が射精してるんだ……）
射精をした事が分かる。キュンッと東子の下腹部も疼いた。
「んふぁああ……。い、いっぱひだひましたね。く、口の中がいっぱひ……んぐっ。ごきゅっごきゅっ……はぁああ……おいひいですぅ♪」
ジュルッと咥えられていたペニスが解放される。春香はクチュクチュと口腔に溜まった白濁液をファルシアに見せつけながら、やがてソレを飲み干した。
「こ、今度は私です！」
その光景を見終わった後、一人の女生徒――西村冬実さんが手を挙げた。
「へ？　わ、わたちはもう……」
金眼■女が驚く。射精はもうした。だからこれ以上の行為はいらないと、彼女の瞳が訴えていた。が、冬実は首を横に振る。
「嘘は言わないで下さい。そこはそんなに硬くなっているじゃないですか」
そことは勿論ペニスの事だ。射精を終えたというのに、ロリシアの肉棒は未だ勃起している。それどころか更に大きさを増していた。

「こ、これは違うの」
「何が違うんですか？　そんなに怖がらなくてもいいですよ。ファルシア様が満足するまで気持ちよくしてあげますからね」
ニコッと冬実は笑う。

「んや、やらぁっ！　も、もう射精したくないのぉ！　止めて、ひゃめてよぉ」
じゅぼっじゅぼっじゅぼっ。
ファルシアが悲鳴を上げる。が、彼女の言葉に耳を貸すものはいなかった。
「しょんなことひわないでくらはい。ほりゃ、きもひいいんれしょ？」
「こんなに……はぁはぁ、お、大きくなってますよ」
「ビクビク震えてますぅ」
三人の女生徒が同時にファルシアの股間に顔を埋めている。一人は先端部を舐め、二人が左右から挟み込むように肉茎に舌を這わせていた。金眼[redacted]女の肉棒は唾液塗れとなっている。
「お口剥いてあげますね」
しかも、彼女達は舐めるだけでは終わらない。ファルシアに対して上目遣いで肉棒を舐めながら微笑むと、包茎ペニスの皮に舌先を差し込んだ。

「ひっ！　や、な、何をしゅるのぉ？」
「何って、むきむきですよ」
舌と唇を使って、容赦なく包皮を捲っていく。ピクンピクンッとロリシアの身体が震えた。膝が笑っているのが見て取れる。やがて肉棒を包んでいた皮は完全に剥かれ、ピンク色の亀頭が露わになった。
「わっ、す、凄く綺麗」
「ホントだ。こんなに可愛いおちんちん見たの初めて」
少女達が感激の声を上げる。
「やら、み、見ないで。見ないでよぉ」
少女達の視線に恥ずかしがるファルシア。勿論耳を貸してはもらえない。それどころかクラスメート達は嫌がる悪魔少女という新鮮な状況に更に興奮し、彼女への責めをより激しいものへと変えていった。
（あ、あんなにファルシア様のを舐めてる……。虐めないで。ファルシア様を虐めないで下さい）
舌がカリ首に絡みつく。肉先秘裂をなぞるように蠢いていた。されるがままのファルシアはポロポロと涙を流している。赤く染まった頬と、荒い息、涙が相まって、何だかとても淫らな表情の様に見えた。

主のそんな様を見ていられない。すぐにでもクラスメート達を止めたかった。が、何故だろうか？　動く事ができない。フェラレイプを受ける金眼■女の姿を見ていると、制止の言葉を口にする事すらできなかった。

「射精るっ！　射精ちゃうのぉっ！」

びゅるっ！　びゅぶるるるっ！

再びファルシアが射精をする。

「凄い。こんなに濃いのが射精た♪」

「あつ～い」

白濁液を浴びせられた女生徒達はうっとりと瞳を細める。

（あ、あんなに射精てる。ファルシア様のがあんなに……）

その光景を見つめながら、ゴクリッと喉を鳴らす。キュンッと下腹部が疼いた。

「私にも下さい。いただきま～す」

それだけでは終わらない。

更に次の女生徒がファルシアの肉棒を咥える。

「も、もうだっめ。駄目なのぉっ！　やら、もう、もう射精したくないのぉ！」

金眼■女は泣き叫ぶ。が、誰の耳にも届かない。まるで取り憑かれたみたいに、クラスメート達はファルシアの白濁液を吸っていった。

「ひぃっひぃっひぃいいっ！　また、また射精るぅっ！」
びゅぶっ！　びゅぶびゅぶびゅぶぅっ！
「やらー！　でひゃうー。また、またでひゃうのぉ！」
どびゅっ！　どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅるるぅ！
「止まらない。止まらないのぉっ！」
ぶじゃっ！　ぶぶびゃぁあっ！
一体何度射精したのだろうか？　傍で見ている東子にも分からなかった。
白濁液を何度撃ち放っても、ファルシアの肉棒は一向に衰えない。それどころか、放てば放つ程に、より大きさを増していっている様に見えた。
勃起ペニスがビクッビクッと震えている。
（ああ、欲しい。ファルシア様のアレが欲しい……）
思い出すのは主から散々に与えられた肉悦。スカートの中に愛液が溢れ出る。ツツッとそれが太股を伝って流れ落ちていくのが分かった。
「も、もう我慢できない」
やがて口が開かれる。ただ、それは東子ではなかった。春香である。
「飲むだけじゃ耐えられない。こ、こっちにも下さい。ファルシア様。私のオマ〇コを使って下さい」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/